神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A note on the perception of affordances for other people

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2007-12-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 本多, 啓, Honda, Akira
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/614

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

他者にとっての環境の意味の知覚についての覚書

本　多　　啓

1　はじめに：コミュニケーションをめぐる一つの問題

本稿は，他者にとっての環境の意味の知覚について検討することにより，生態心理学に基づくコミュニケーション理論を展開させることを目的とする。[1)]

本論に入る前に，まず，次のような仮想の状況を考えてみたい。

(1) 太郎は小さな子どもである。

あるとき，太郎が目の前にあるドアを開けようとしたところ，いくら押しても開けることができない。

そこに，大人のレスラーである次郎が通りかかった。「良かった」とほっとした太郎は，さっそく次郎に助けを求める。

「このドア，重くて開かないよ」

そこで次郎が軽く力を入れて押すと，ドアはあっけなく開いた。

このとき，次郎は「このドア，重くて開かないよ」という太郎の言葉をどのように評価・反応するであろうか。[2)]

通常の大人であれば，太郎が事実に反することを述べた（(2a)）とか，太郎が，自分には理解不能なことを述べた（(2b)）といったように評価することはないであろう。

(2) a.「こら太郎，ウソをつくんじゃない。ドアは簡単に開くじゃないか」

b.「こら太郎，わけのわからないことを言うんじゃない。ドアは簡単に開くじゃないか」

大人のレスラーである自分と小さな子どもでは力が違うから，自分に開けられるドアであっても太郎には開けられないこともあるということを，当たり前のこととして受け入れるであろう。また逆に子どもである太郎の方も，自分には開けられないドアを大人である次郎には開けることができるであろうと考えていたであろう。そうでなければ，太郎が次郎に助けを求めて声をかけることはなかったであろう。

しかしながら，筆者自身によるものも含めて，これまでの生態心理学に基づくコミュニケーション論（本多（2005），古山（2006））は，この点に関する議論が十分ではなかった。本論の直接の目標は，これを明確にして，解決策を探ることにある。

2　これまでの生態心理学に基づくコミュニケーション論の不十分な点

生態心理学に基づくコミュニケーション理論の骨格をなす概念として，「知覚の公共性」がある。これは，知覚対象を特定する情報（不変項）は環境の中に実在するものであり，個別の知覚者の頭の中にあるものではないため，任意の知覚者がこの情報を探索・検知できるということである。これは，環境の持つ意味が（少なくとも可能性としては）任意の知覚者によって共有できるものであるということであり，これが，その意味をめぐる複数の知覚者間のコミュニケーションが成立するための必要条件となっているわけである。

ここで問題になるのは，生態心理学における知覚の公共性の議論では，環境の中の事物があらゆる知覚者にとって同じ意味を持つかのように語られていることである。たとえば，古山（2006：89）は次のように述べる。

(3) このように，環境内の対象や事象を特定する不変項としての情報は，

そもそも本質的に公共的なものである。したがって，異なる個体間において，あるいは，さらに言えば，解剖学的な眼のつくりが異なりうる異種間であっても，一定の限度内ではあるが，環境内の対象や事象が共有できることを保証するのである。種が異なっても，同じ獲物をめぐって競合したり，あるいは捕食者と被捕食者のあいだで追い・追われの関係をもつことができるという事実に関しても，今まさにそのような状態にあるかどうかについては，そのことを特定する情報が共有されていなければ成立しないであろう。

これは，必ずしも，すべての観察者が常にすべての情報を検知できていることを意味するわけではない。むしろ，多くの場合，そうではないことのほうが多いかも知れない。しかしながら，不変項としての情報が公共的であり，探索をすれば対象や事象を知覚できることの根拠が環境の側にあることに変わりはない。それは，検知されるべくして環境の中に厳然として存在し，相互作用や共同注意の根拠となる。

また，筆者自身は本多（2005）において，知覚経験の公共性を「不変項の実在」に加えて「観察点の公共性」の概念によって議論したが，そこでは複数の知覚者の間で知覚経験の共有が成立する条件として，「知覚者が，自身の状態に関して他の知覚者と有意な差がないと信じることができる」ということを想定している。

以上を踏まえて，(1)の状況を検討してみよう。

(1)は，あるドアを開けることができる大人と，開けることができない子どもの間での，そのドアをめぐるコミュニケーションの例である。大人にとっては簡単に開けることができるドアが子どもにとっては開けることができないということは，同じ一つのドアの持つ意味（アフォーダンス）が，大人と子どもで異なるということである。そしてその相違は，大人と子どもの力（エフェクティヴィティ）の違いに対応している。

この場合，力の弱い子どもによる「このドア開かないよ」という発話を大

人が適切に理解できるためには，大人は次のことができなければならない。

(4) 同じドアの持つ「開ける」という行為の可能性(アフォーダンス)が，自分と子どもとでは異なる可能性があることを理解すること。とくに，力の強い自分にとっては簡単に開けることができるドアが，力の弱い子どもには開けることができない可能性があることを理解すること。

これができなければ，(1)における大人は，「このドア開かないよ」という子どもの発話を適切に理解することができないことになる。

これに関して，古山（2006：89）では何も述べられていない。また本多（2005）による議論は「知覚者が，自身の状態に関して他の知覚者と有意な差がないと信じることができる」という条件を想定しているため，(4)を取り込むことができない。その結果，大人が(2)のような反応をすることを予測することになる。まず，大人が自身の状態に関して子どもと有意な差が無いという誤った信念を持っている場合には，大人は(2a)のように「太郎が事実に反することを述べた」と評価することにならざるをえない。また，そのような信念を持てない場合には，コミュニケーション成立の基盤たる知覚経験の共有が成立しえないため，コミュニケーションそのものが成立する根拠が存在しないことになる。すなわちこの場合，大人は(2b)のように，子どもが理解不能なわけのわからないことを述べたと評価することになってしまうわけである。

3　他者にとっての環境の意味の知覚

上記の(4)は，より一般的には，次のように言い換えることができる。

(5) 環境の中の対象や事象が持つ意味が，異なる行為・知覚者間で（あるいは，少なくとも自分と他者の間で）知覚者のあり方の違いに応じて異なる可能性があるということを理解すること

さらに，(1)における「このドア，重くて開かないよ」が真であると大人が納得するためには，当該のドアが子どもにとって開けることができないと

いうことを大人がある程度は知覚できなければならない。すなわち，より効果的なコミュニケーションが成立するには，一般に次のことができることが求められることになる。

(6) 環境の中の対象や事象が自分以外の他者にとってもつ意味を実際に知覚すること

これについて，生態心理学ではどのように考えられているのだろうか。

(5)に関して言えば，まず，同一の事物が異なる知覚・行為者にとって異なる意味（アフォーダンス）を持ちうるということ自体は，当然のことながら，生態心理学では早くから知られている。もっとも，通常は(5)のような「異なる」ということを前面に押し出した表現ではないが。たとえば佐々木(1994）は次のように述べる。

(7)「手を使わずに座れるイス」の高さは座る人の脚の長さの0.9倍であり，7メートル先に提示されるバーの先に行くために「くぐる」か「またぐ」かを大学生に聞くと，その答えは知覚者の脚の長さの1.07倍のところを境に変わる。1.07という境界値よりも低いバーは「またぐ」行為に，それよりも高いバーは「くぐる」行為にふさわしいものと見える。

（佐々木（1994：59））

これは，同じ高さのバーであっても，それが「またぐ」にふさわしいものと知覚されるか「くぐる」にふさわしいものと知覚されるかが，知覚者の脚の長さの異なりに応じて異なるものだということを端的に示している。

このようにアフォーダンスが知覚者に応じて異なるということは，アフォーダンスが個々の知覚者によって主観的に構成されうるものだということを意味しない。アフォーダンスとは，事物と知覚・行為者との関係である。関係は客観的に実在するものであり，バーの場合にはそれが「脚の長さの1.07倍」と特定されているのである。[3)4)]

問題は，知覚・行為者がそのことを理解できるかどうかであるが，(6)ができれば，これは解決されることになる。そして(6)について，生態心理学者は，

これが可能であることを示している。

生態心理学におけるアフォーダンス知覚の研究は知覚者自身にとってのアフォーダンスの知覚を中心にしてきているが，自分以外の他者にとってのアフォーダンスの知覚の研究もなされている（Stoffregen, Gorday, Sheng and Flynn (1999), Ramenzoni and Riley (2005), Ramenzoni, Riley and Davis (2007), Ramenzoni, Riley, Shockley and Davis (2007 in press))。ここでは Stoffregen et al. (1999) の知見を簡単に紹介する。

Stoffregen らは，背の高い行為者と低い行為者にとっての椅子のアフォーダンス（それぞれの行為者にとっての「安定して座れる一番高い椅子の高さ」と「すわり心地の良い椅子の高さ」）を観察者が知覚するという実験を行った。その結果，観察者は異なる身体特性を持つ他者にとってのアフォーダンスを，かなり正確に知覚することができた。すなわち(6)は，少なくとも「座る」のような身体的な行為の可能性に関しては，可能であるということである。

この研究に関しては，さらに二点重要なことを指摘することができる。第一に，観察者が行為者にとっての椅子のアフォーダンスを知覚できたのは，椅子と行為者が同じ場に存在するときだけであった。椅子と行為者が同一の場にないときには，両者が同時に提示され，ともに観察者の視界の中にあっても，観察者によるアフォーダンス知覚は成功しなかった。これは観察者が，他者にとっての椅子の行為の可能性を知覚する際，椅子と行為者の間に客観的に実在する関係としてアフォーダンスを知覚していたことになる。第二の点は，第一の点と関係することであるが，観察者による他者にとってのアフォーダンスの知覚は，観察者自身の身体能力を他者に投影する形でなされていたのではないということである。

4　自己中心性と脱中心化

ここまで取り上げてきた事柄は，発達心理学でいう自己中心性（egocen-

trism）とそこからの脱却，すなわち脱中心化（decentering）に関わっている。自己中心性については，岸田（1977：249-251）にしたがって，少なくとも次の二つの段階を想定する必要がある。

（8）a．一次的自己中心性:

自分の立場からのみ環境を見ること。

b．二次的自己中心性:

他者には自分の立場とは異なる立場があるということは認めるのだが，他者の立場に自分をおいてみるという形でしか他者の立場を捉えないこと。この際，他者を暗黙のうちに自分と同じような人間であると想定すること。

（8a）は，ピアジェの「三つ山問題」で取り上げられたような自己中心性が該当する。ここではより単純な，次のような状況を考えてみよう。太郎と次郎が向かい合って立っており，太郎は一方の面に「○」，もう一方の面に「×」が書かれた板を持っているとする。そして，太郎自身に面しているのは「×」が書かれた方の面であったとする。このとき，次郎には「○」の側が面していることになる。このとき太郎に，「いま太郎君には「×」が見えていますね。それでは，次郎君には何が見えているかな？」と聞いたとする。そこで太郎が「「×」が見えてる」と答えたら，太郎は一次的自己中心性の段階にとどまっていることになる。太郎は，いま現在他者に見えているものを，自分に見えているものと区別することができないでいるのである。別の言い方をすれば，「他者の視点」の獲得（perspective taking）ができないでいることになる。

それでは，同じ状況において太郎が，「「○」が見えてる」と答えたらどうであろうか。この場合，太郎は自己中心性を脱却しているといえるだろうか。答えは，「一次的自己中心性は脱却しているが，二次的自己中心性は脱却していない可能性は残る」ということになる。実際には，次郎は視力の関係などで何も見えていないかもしれないのである。このように，他者を暗黙のう

ちに自分と同じような人間であるとみなし，「自分が今の次郎の位置に立てば「○」が見えるはずだから，今の次郎も(次郎の位置に立ったときの自分と同じように)「○」が見えているだろう」と想定するのが，二次的自己中心性の段階にとどまるということである。[5)]

生態心理学においては，一次的な自己中心性からの脱却は不変項の実在(と観察点の公共性）に支えられていることになり，二次的な自己中心性からの(ある程度の)脱却は，自分とは異なる他者にとっての環境の意味の知覚によることになる。

すでに明らかなように，(1)で提示した問題はこの二次的自己中心性をめぐるものである。そして古山（2006）はこの問題には言及せず，本多（2005）は，この問題を解決する道を原理的に閉ざしていたことになる。そして第3節で紹介した研究は，人間がこの二次的自己中心性をある程度まで脱却できることを示している。

もっともこの脱却は，あくまでも「ある程度まで」にとどまる。第3節で言及した Stoffregen et al.（1999）で取り上げられた行為は「(心地よく）座れるかどうか」であり，Ramenzoni and Riley（2005），Ramenzoni et al.（2007, 2007 in press）で取り上げられているのは「(手を伸ばすことにより，あるいはジャンプすることにより)高所にあるものに手が届くかどうか」であった。これらはいずれも比較的単純と言える身体的行為である。また，Stoffregen et al.（1999）が示したように，行為者と行為対象が同一の場に存在することが重要であった。

したがって，二次的自己中心性からの完全な脱却は，実際には困難が伴うことになる。岸田（1977：249）は，「われわれは，この一次的自己中心性から脱しても，いわば二次的自己中心性からはなかなか脱することができない」と述べている。[6)] また，岸田とは別の文脈であるが，浜田（1999）は，「本源的自己中心性」という概念を提案している。

(9) 世の中の音を聞くのも，この自分の耳をとおしてのことであるし，世

の中のものに触れるのも，この自分の手をとおしてのことである。あるいは目の前でもがき苦しんでいる人を見て，その苦しみが我がことのように如実に感じられても，それでもその苦しみをそのまま自分の身体に引き受けることはできない。私たちはこの身体の位置から，この身体をとおして世界を体験しているのである。／いくら脱中心化しても，自分の身体の位置からこの世の中を生きる以外にないという自己中心性は，どこまでいっても残る。身体をもつということは，そもそもそういうことなのである。これを私は本源的自己中心性と呼ぶことにしたい。身体は個々それぞれ，それゆえ個々人はそれぞれの身体の位置からこの世の中を生きる以外にはない。それは発達によって乗り越えられるようなものではないのである。（浜田（1999：101））[7]

5　共有されない意味をめぐるコミュニケーション

筆者が本多（2005）で提示したコミュニケーション観は，突き詰めて言えば，「コミュニケーションとは，環境の意味を共有することである」ということであった。この背後には，「環境の意味は公共的である。したがって，環境は，誰にとっても同じ意味を持つ」という前提があった。あるいは，すでに述べたように，「知覚者が，自身の状態に関して他の知覚者と有意な差がないと信じることができる」場合だけを想定することにより，この前提が成り立つ場合だけを議論の対象としていたことになる。

それに対して本稿で問題にしているのは，他者と共有されない環境の意味をめぐってのコミュニケーションである。その場合にコミュニケーションが成立しないかといえばそうではなく，(1)のような場合でも通常はコミュニケーションは成立する。その基盤として，自分とは異なる他者にとっての環境の意味を知覚する能力があるわけである。

ここで，次のような状況を考えてみよう。

(10)　太郎は小さな子どもであり，次郎は大人である。

あるとき，太郎が目の前にあるドアを開けようとしたところ，手が取っ手に触れる前に次郎が通りかかった。

太郎を見た次郎が言う。

「そのドアは，重くて開かないよ」

このとき，次郎は，「そのドアは重くて開かないよ」という言葉で何を伝えようと意図したのだろうか。あるいは，太郎は次郎のこの言葉をどのように解釈するであろうか。可能性としては，次のようなものがあるだろう。

(11) a．ドアの立て付けが悪いため，誰もこのドアを開けることができない。

b．(大人であるにもかかわらず)極度に力が弱いために，発話者である次郎にはこのドアを開けることはできない。(しかしもしかしたら聞き手である太郎には開けることができるかもしれない。)

c．次郎は大人であるため，次郎にはこのドアを開けることはできる。しかし太郎は次郎とは違って力が弱いため，太郎にはこのドアを開けることはできない。

(11a)は環境の意味が共有される場合である。(11b)は(1)の状況を逆転させたもので，このように意図あるいは解釈される可能性は（次郎が大人であることを考慮すれば）高くはないが，ありえないわけではない。そしてここで注目したいのは，(11c)という意図・解釈がありうるということである。たとえば(10)には，「おじちゃんが開けてあげるよ」などと続けることができる。

この場合，次の(12a)のように「太郎には」「君には」を付加することもありうるが，そのような表現を付け加えない(12b)もありうる。

(12) a．そのドアは，重くて太郎には／君には開かないよ

b．そのドアは，重くて開かないよ

(1)において次郎が太郎の言葉を適切に解釈し，反応した場合，次郎は太郎の姿を見ながら太郎の言葉を聞くことで，太郎の言葉を通じて太郎にとっ

ての環境の意味を知覚したことになる。また，(10)において次郎が(11c)を意図して（12b）を発話した場合，次郎は太郎の姿を見ながら太郎にとっての環境の意味を知覚することで，その太郎にとっての環境の意味を発話したことになる。

このように日常のコミュニケーションにおいては，話し手としても聞き手としても，自分とは異なる他者の意味を（さまざまな程度に）知覚することがありうる。そして実際には，コミュニケーションが円滑に進んでいる場合には，話し手と聞き手の双方が相互に相手にとっての環境の意味を知覚しあっていると考えられる。それによって，環境の意味の共有が(完全ではないにしても)達成されるわけである。

また，(1)においても（11c）においても，次郎は太郎に対して共感的に対応していることになる。すなわち，本稿の枠組みでは，共感の能力の一つの基盤は，自分とは異なる（かもしれない）他者にとっての環境の意味を知覚する能力であると言えることになる。

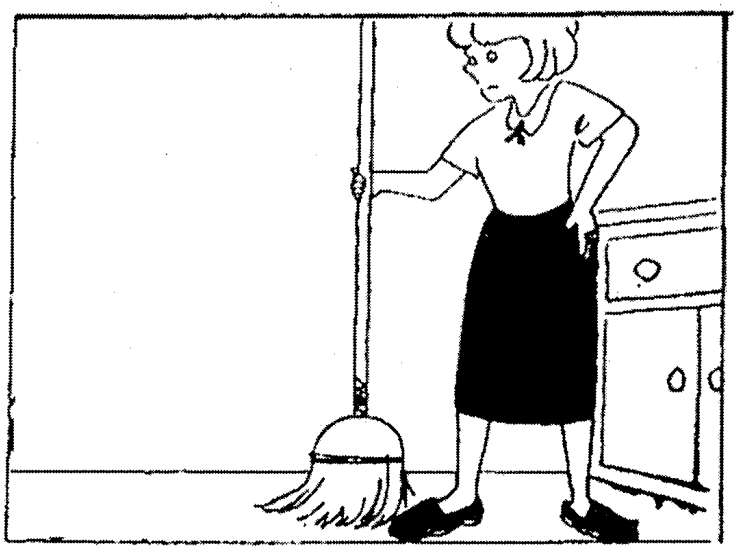
6　テクスト理解への展開の可能性

6.1 「＜見え＞先行方略」から「背後霊的視点」へ

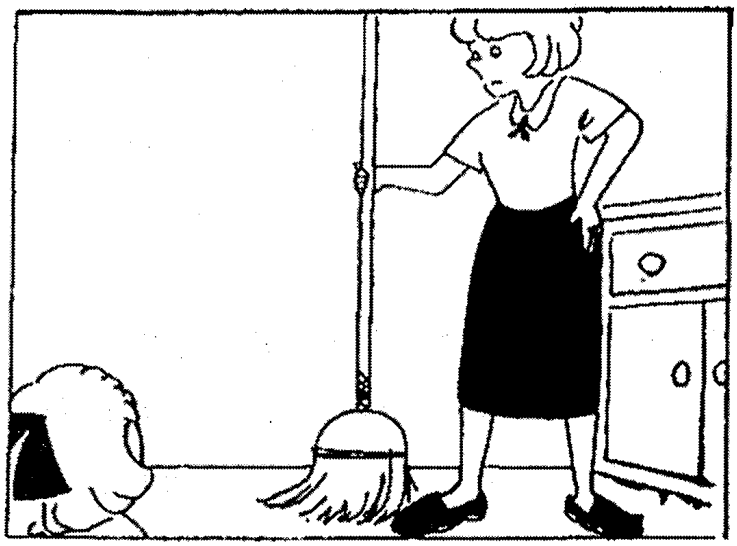
文学作品における登場人物の心情を共感的に理解するための方略として，宮崎（1985），宮崎・上野(1985）は「＜見え＞先行方略」を提唱した。これは，環境の知覚が自己知覚と相補的であるという生態心理学の自己知覚観に基づくもので，文章を読む際に，登場人物にとっての状況の見えを読者が能動的に構築することにより，そのときの登場人物の心情を共感的に理解することを促進しようという考え方である。筆者自身は本多（2005）において，現象描写文の感情表現としての機能を説明する際に「＜見え＞の共有による自己知覚の共有，さらにそれによる共感形成」という議論を提示したが，それは「＜見え＞先行方略」の考え方を支える原理と同一の原理によっている。

元来「＜見え＞先行方略」は既存のテクストを理解する際の登場人物の心

情把握のためのストラテジーとして提案されたものであるが，これは新しいテクストを構築する上での方法論ともなりうる。そこで絵本・ビデオ等の映像メディアにこのアプローチを適用する実験を行ったのが宮崎（1993，1994）である。すなわち，絵本の場合であれば，登場人物の姿を絵の中に書き込まず，かわりにその人物にとっての状況の見えのみで絵本を構成する，というやり方で絵本を制作したわけである。



＜見え＞先行方略
（宮崎(1993)をもとに作成）



背後霊的視点(宮崎(1993))

宮崎自身の報告によれば，実際には，このアプローチでははっきりとした結果は得られなかった。そこで代わりに宮崎が提唱したのが「背後霊的視点」であった。これは，登場人物にとっての状況の見えを表現した映像の中に，その人物の後ろ姿を加えることである。

本稿の枠組みでは，＜見え＞先行方略の問題は二次的自己中心性の問題であったと解釈できることになる。この方略は，読者を登場人物と同じ位置に立たせる（読者の視座（観察点）を登場人物の視座と完全に一致させる）ことによって登場人物にとっての状況の見えをそのまま読者に経験させ，それ

により読者に状況の意味を知覚させようというものである。したがって，一次的自己中心性の脱却は，原理上自動的に行われることになる。

しかしここで読者が知覚できるのは，読者自身にとっての状況の意味に過ぎない。それが登場人物にとっての意味と一致する保証はない。これは二次的自己中心性の問題である。

背後霊的視点においては，読者は登場人物の身体を，部分的であるにせよ見ることができる。このことは，Stoffregen らが指摘した，行為者と行為対象が同じ場に存在することが必要であるという制約に対応する可能性がある。そしてこれは(5)を保証し，さらに(6)をある程度まで可能にするものである。

6.2　テクスト理解における視点現象と「意識の主体」の問題

「<見え>先行方略」に基づくテクスト構成から「背後霊的視点」に基づくテクスト構成のへの転換が同一のテクストの中で行われているのが，視点論との関係でしばしば取り上げられる次のテクストである。

(13)　国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

向側の座席から娘が立って来て，島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いっぱいに乗り出して，遠くへ叫ぶように，「駅長さん，駅長さん。」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は，襟巻で鼻の上まで包み，耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると，鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで，雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた。(『雪国』)

このテクストについて，まずは山岡（2001）における詳細にして緻密な分析を参照されたいが，本稿の問題意識との関連で見るならば，冒頭の「信号

所に汽車が止まった」までは，徹底した「<見え>先行方略」によって構築されている。その後，固有名による名指しが繰り返されることにより，読者はそれまでのテクスト全体の意識の主体，あるいは視点人物が島村であったことを事後的に知るとともに，述べられた状況の意味ないし状況に対する捉え方が，あくまでも島村のものであって，読者自身の場合とは異なる可能性があることを知る道が開かれるわけである。

すなわち，言語によるテクストにおける明示的な名指しは，映像メディアの場合における後姿に対応すると言える。[8)9)]

7　まとめに代えて：他者理解についての理論への意味合い

本稿では他者にとっての環境の意味の知覚についての生態心理学の研究を紹介し，それがコミュニケーションに対して持つ意味合いを検討してきた。最後に，本稿で紹介した知見が認知科学全体に対してもつ意味合いを素描して，本稿のまとめに代えたい。

現在の認知科学における重要なテーマの一つに，「他者の心についての理解」ないし「他者理解」がある。これに関しては，現在，「理論説」と「シミュレーション説」が有力な考え方として提唱されている（佐伯(2007)）。

「理論説」とは，「人は他者の心についての「理論」を頭の中に持っており，この理論を適用することによって他者の心を推測・理解するのだ」という考え方である。それに対して「シミュレーション説」は，「他者の立場に仮想的に自分をおいてみることにより，あるいは仮想的に他者になってみることにより，他者の心のあり方を仮想的に経験することで，人は他者の心を理解するのだ」という考え方である。

一方，第3節で言及した Stoffregen et al.（1999）によれば，椅子が他者に対してもつアフォーダンスを知覚する際，観察者は，椅子と行為者の間に客観的に実在する関係を直接知覚していた。

すなわち，生態心理学は他者理解に関して，理論説ともシミュレーション

説のいずれとも異なる第三の考え方を提示できる可能性がある。それは「直接知覚説」あるいは「情報の直接抽出説」と言うべき説である。[10)]

注

1）本稿は本多(2005)からの展開ないし修正であり，同書の内容を前提とする。

2）「このドアは開かない」のような表現は「可能」の意味をもち（大崎（2005）などを参照），英語の中間構文に相当する性質をもつ(影山（1998），Kageyama（2002））。しかし日本語と英語ではこのような文の使われる範囲に差がある。

（i）a．このバーベルは持ち上がらない。

b．*This barbell won't lift up.

日本語の文は，実際に持ち上げてみたときにその経験を語る文として使えるが，対応する英語の文は「恒常的な特性を表すことになり，本来バーベルが持ち上げるためのものであることに抵触する」（中村（2004: 383））ため，容認不可能になる。

本稿では日本語のコミュニケーションを対象とする。

3）アフォーダンスが関係であるということを見落とすと，Lakoff（1987）のように生態心理学を客観主義的と誤解することになる（本多（2005））。筆者の見るかぎり，アフォーダンスが関係であるということの意味合いをもっとも明確な形で議論しているのは，河野哲也氏である。この点については，最近の著作(河野（2007））においても詳細な議論がなされている。また，Stoffregen et al.（1999）にも関連する議論がある。

4）厳密には単一の知覚者にとっても，その状態の異なり(疲れている，重い荷物を背負っている，など)に応じて知覚されるアフォーダンスは異なる（Proffitt（2006））。

5）伊藤（2005：104-105）に，この岸田の区別に基づいた興味深い議論がある。

6）伊藤（2005：104-105）も同様の指摘をしている。

7）道田（2006）もあわせて参照されたい。

8）赤羽（2007：58－64）および特に田口（2007：68－78）で取り上げられている現象も，「＜見え＞先行方略」と「背後霊的視点」との関連で見ると興味深いものであるが，本稿では紙幅の関係で割愛せざるをえない。

9）なお，熊倉（2006），小澤（2006）は，「島村」ではなく「私」の方が日本語の文章として自然であるとしている。「私」を用いた場合には「島村」とした場合よりも（二次的に）自己中心的な解釈を誘引する可能性があるようにも思われるが，この点についてはさらなる検討が必要である。

10）本節で述べた点については，Ramenzoni et al.（2007 in press)に詳しい議論がある。

参考文献

Kageyama, T.（2002）. "On the Role of the Event Argument in Voice Alternation,"『人文論究』52（1），96－79. 関西学院大学.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press.

Proffitt, D. R. (2006). "Embodied Perception and the Economy of Action," *Perspectives on Psychological Science* 1 (2), 110−122.

Ramenzoni, V. C. and Riley, M. A. (2005). "Perceiving whether or not Another Person can Use a Step to Reach an Object," In H. Heft and K. L. Marsh, *Studies in Perception and Action VIII,* 15−18. Mahwah, NJ: LEA.

Ramenzoni, V. C., Riley, M. A. and Davis, T. (2007). "Kinematic Information for the Perception of Affordances for Others," In S. Cummins-Sebree, M. A. Riley and K. Shockley, *Studies in Perception and Action IX*, 214−217. New York and London: LEA.

Ramenzoni, V. C., Riley, M. A., Shockley, K. and Davis, T. (2007 in press). "An Information-Based Approach to Action Understanding," *Cognition.*

Stoffregen, T. A., Gorday, K. M., Sheng, Y.-Y. and Flynn, S. B. (1999). "Perceiving Affordances for Another Person's Actions," *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance* 25 (1), 120−136.

赤羽研三 (2007).「語りの流れのなかで構築される視点」.『水声通信』19, 54−65. (2007年 7 / 8 月号).

伊藤哲司 (2005).『常識を疑ってみる心理学——「世界」を変える知の冒険』. 北樹出版.

大崎志保 (2005).「日本語の自動詞による可能表現——動詞制約を中心に——」.『日本語文法』5 (1), 196−211. (日本語文法学会).

小澤伊久美 (2006).「川端康成『雪国』に見られる話者の時間意識——原文と英訳との比較から」.『日本認知言語学会論文集』6, 581−584.

影山太郎 (1998).「日本語と英語」. 玉村文郎 (編),『新しい日本語研究を学ぶ人のために』58−83. 世界思想社.

岸田　秀 (1977).「性格について」.『別冊宝島 (1977年 8 月)』. (岸田(1996 : 247−263)).

岸田　秀 (1996).『続ものぐさ精神分析』. 中央公論社. (中公文庫1996年改版).

熊倉千之 (2006).「<主観>を本質とする日本文学. 語り手の声が表出する世界」.『言語』35 (5), 28−34. (2006年 5 月号).

河野哲也 (2007).『善悪は実在するか: アフォーダンスの倫理学』. 講談社.(講談社選書メチエ 399).

佐伯　胖 (2007).「ひとはどのようにして「他人の心」を理解するのか」. 佐伯　胖 (編),『理解とは何か 新装版』, 181−210. 東京大学出版会. (コレクション認知科学 2 解題).

佐々木正人 (1994).『アフォーダンス : 新しい認知の理論』. 岩波書店.

田口紀子 (2007).「小説テクストにおける「視点」」.『水声通信』19, 66−78. (2007年 7 / 8 月号).

中村芳久 (2004).「消えたエージェント」. 河上誓作教授退官記念論文集刊行会(編)『言葉のから

くり(河上誓作教授退官記念論文集)』 371－387, 英宝社.
浜田寿美男 (1999).『「私」とは何か:ことばと身体の出会い』. 講談社. (講談社選書メチエ170).
古山宣洋 (2006).「知覚の公共性を支えるもの――生態心理学が変えた知覚観」.『科学』76 (1), 85－90. (2006年1月号).
本多　啓 (2005).『アフォーダンスの認知意味論――生態心理学から見た文法現象』. 東京大学出版会.
道田泰司 (2006).「思考のパースペクティブ性に関する一考察」.『琉球大学教育学部紀要』69, 95－106.
宮崎清孝 (1985).「文学の理解と視点―認知心理学の立場から―」.『日本語学』4 (12), 41－50. (1985年12月号).
宮崎清孝 (1993).「映像をとおした共感的理解における係留点としての人の背面像の効果」.『日本教育心理学会総会発表論文集』35, 362.
宮崎清孝 (1994).「映像メディアでの共感的理解における「背後霊的視点」の効果」.『大妻女子大学紀要家政系』30, 161－173.
宮崎清孝・上野直樹 (1985).『視点』. 東京大学出版会.
山岡　實 (2001).「『雪国』の冒頭文の日本語らしさをめぐって」.『英米言語文化研究』49, 71－85. 大阪府立大学 (山岡 (2005) に再録).
山岡　實 (2005).『「語り」の記号論――日英語比較物語分析(増補版)』. 松柏社.(初刊2001年).